

# 博物館 Dictionary No.183

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

とくべつてんらんかい りんぱ たんじゅう りんぱ みやこ いるど  
—特別展覧会「琳派誕生400年記念 琳派 京を彩る」—

## きょうやき めいこう けんざん 京焼の名工・乾山

きょうと こくりつはくぶつかん きよみずでら さんどう ごじょうざか しゅうへん ももやま  
京都国立博物館からもほど近い、清水寺の参道の五条坂や茶わん坂周辺では、桃山時代、  
えど げんだい いた げんざい こ  
江戸時代から現代に至るまで、たくさんのやきものが作られています。現在、それら五  
じょうざかしゅうへん や ふく や そうしゅう きょうやき よ  
条坂周辺で焼かれたやきものを含む、京都で焼かれたやきものを総称して、京焼と呼ん  
でいます。京焼は、茶の湯に用いられる茶碗や茶壺などといった高級なやきものから食  
器にいたるまで多種多様なやきものが作られ、やきもの愛好家のみならず、私たちの日



きび え かんざんじつとくず かくざら お がたけんざん  
《鏤絵寒山捨得図角皿》尾形乾山

じょう うつわ  
常の器としても親しまれています。ちなみに、昭和30年代頃から登り窯からガス窯、電  
がま てんかん こう どけいざいせいちよう ごじょうざかしゅうへん しがい かまや  
気窯などの転換や、高度経済成長によって五条坂周辺も急速に市街地化したために窯焼  
きの煙への懸念もあり、多くの陶工たちが山科や宇治などの郊外へと移動しました。そ  
のため、現在では清水寺周辺でのやきものの生産はあまり行われていません。

さて、京焼の歴史を振り返る上で、かくことのできない人物といえただれでしょうか。  
それは野々村仁清と尾形乾山の二人の陶工です。優美で趣きがあり、鮮やかな色絵を駆  
しにんせい もみじ きく じょうきやう けんざん  
使した仁清、紅葉や菊など草花や詩歌の状況そのものを形にした乾山、いずれもみるも  
のを魅了するもので、その技術や意匠は、その後の京焼の陶工たちに多大な影響を与え  
ました。なかでも、乾山は絵付と書や画賛（絵についての詩など）を巧みに組み合わせ、  
か もの ぞうけいぶつ とくちやう  
書画の掛け物の様子を角皿に表し、立体の造形物であるやきもの特徴を活かし、それ  
までになかった意匠（デザイン）を生み出しました。

乾山は、寛永三年（1663）、京都の呉服商・雁金屋の三男として生まれ、幼名は権平とい  
 い、兄には絵師として有名な尾形光琳がいます。乾山は、本阿弥光悦の孫で陶芸も  
 得意とした光甫や、ロクロを使わずに手やヘラだけで形作る楽焼の茶碗を製作する樂家  
 の四代一人とも親しかったといわれ、若いころより作陶に興味を持っていたようです。  
 二十代から三十代にかけては、名前も深省と改め、仁和寺の近くに習静堂という庵を構  
 えて読書三昧の隠遁生活を送っていました。そのような生活を送っていた乾山が、窯を  
 築き、作陶を始めるのは、元禄十二年（1699）、乾山三十七歳の時のことです。元禄七年  
 （1694）には、公家の二条家より開窯の地である鳴滝泉谷の山屋敷を拝領し、開窯直前  
 には野々村仁清家から陶法を伝授してもらうなど、早くから作陶の準備を進めていたの  
 でしょう。

今回は館蔵の乾山焼、銹絵寒山拾得図角皿を紹介し、型作り成形された正四方の  
 一对の角皿で、全体に白泥による白化粧を施し、鉄分を含んだ上絵具で人物や贅を描き、  
 その上に透明釉をかけて焼いています。二枚ともに見込周縁（皿の底の縁）を界線で囲  
 んで、中ほどに人物図を描き、その左右に贅や銘文（自分の名前）を記しています。経  
 卷を開いている人と箒を持っている人が描かれています。二人は寒山と拾得という人  
 物で、中国・唐代、隠遁生活を送った伝説的な僧侶とされ、禅画の画題として、よく描  
 かれるものです。本作は光琳が寒山拾得図を描き、その脇に乾山が詩文を記しているこ  
 とから、光琳、乾山兄弟の合作といえます。このような合作は、宝永六年（1709）、光琳  
 が出向していた江戸より京都へと戻ってきた以降であることが、落款や印章、書風など  
 の研究で明らかとなってきています。したがって、光琳が帰洛してから没する正徳六年  
 （1716）までの7年ほどの間に作られたものと考えられています。この時期は乾山焼のな  
 かでも、兄光琳と共同で、絵付けを主体とした独自のやきものを生み出しており、本作  
 も光琳、乾山の画風や製作技法などを考  
 える上で重要な作品となっています。陶  
 工となる以前、隠遁生活を送っていた乾  
 山が、文人文化への憧れを持ち続けてい  
 たことを感じさせる作品です。



《色絵氷裂文皿》尾形乾山

銹絵寒山拾得図角皿のほかに、当館で  
 は赤、青、緑、黄、紫、茶の鮮やかな色  
 彩で氷裂文を描いた五枚組の色絵氷裂文  
 皿が所蔵されています。一枚の皿の高台裏には、「日本元禄／年製乾山／陶隠（印）」と  
 記され、元禄十二年（1699）の鳴滝に乾山焼の窯が開窯して間もない頃の作として注目  
 されます。

（工芸室 研究員 降矢哲男）